

令和5年度秋田県水産振興協議会 議事要旨

1 開催日時 令和6年3月18日(月) 13:30~15:20

2 開催場所 秋田地方総合庁舎6階 601会議室

3 出席者 【委員】

堀内 満也 (八峰町長) [会長]

湊 智志 (男鹿市長代理：産業建設部長)

池田 智成 (にかほ市長代理：農林水産部長)

船木 律 (秋田県海区漁業調整委員会 会長代理)

藤田はるみ (秋田県漁協女性部連絡協議会 会長)

菊地 勇 (秋田県内水面漁場管理委員会 会長代理)

小玉喜久子 (秋田県地域婦人団体連絡協議会 会長)

高橋 笑子 (生活協同組合コープあきた 地域理事)

高橋 一孝 (公募)

【事務局】

阿部 浩樹 (水産振興センター所長)

三浦 信昭 (水産振興センター 総務企画室長(兼)資源部長)

中林 信康 (水産漁港課長)

高橋 俊行 (水産漁港課 政策監(兼)チームリーダー (以下「TL」))

斎藤 和敬 (水産漁港課 調整・振興チーム TL)

秋山 将 (水産漁港課 調整・振興チーム 副主幹)

藤田 宏 (水産漁港課 調整・振興チーム 副主幹)

松井 崇人 (水産漁港課 調整・振興チーム 主任)

福田 姫子 (水産漁港課 調整・振興チーム 主任)

長谷部寛人 (水産漁港課 調整・振興チーム 主事)

戸坂美沙子 (水産漁港課 調整・振興チーム 技師)

加藤 雄平 (水産漁港課 調整・振興チーム 技師)

奥山 忍 (水産漁港課 漁業管理チーム TL)

百瀬 夏実 (水産漁港課 漁業管理チーム 主事)

4 議 事 (1) 令和5年度主要事業の実施状況について

(2) 令和6年度施策・事業の概要について

(3) 消費・安全対策交付金事業の事後評価について

○ 議事（１）を説明した後の質疑応答

高橋（一）委員 目指す成果の安全係船岸の充足率とはどのような数値なのか。

高橋政策監 安全係船岸の充足率とは、漁港の岸壁等に安全に船を止めることができるかを充足率として数値で表している。

防波堤等を整備した場合、漁港内の静穏域が改善され、安全に船を止めることができる延長が拡大することから、それを指標としている。

○ 議事（２）を説明した後の質疑応答

堀内会長 秋田版蓄養殖フロンティア事業は令和４年から進めている様であるが、トラフグ、クルマエビの蓄養殖の進捗状況は。

斎藤ＴＬ トラフグについては、まだ海での養殖は行っていない。現在、水産振興センターでは、放流用種苗の一部を残し、養殖用種苗として 500 グラムぐらいまで大きくしており、来年度、これを用いて海面養殖する計画である。

クルマエビは、ここ２年ほど養殖試験を行い、令和５年１２月に出荷するところまで来たが、生残率が悪いことや、冬期間のため生育期間が長くなってしまふなどの課題が生じている。

クルマエビは通常、夏に卵を産み、それから孵化した稚エビを養殖に使うと、秋から冬の低水温期の養殖となり、成長が遅くなることや、加温すると経費が掛かり増しとなるなど課題が多く、いろいろ試行錯誤をしてくところ。

来年度は、親の成熟時期を加温によりコントロールして、その産卵期を早めるといった種苗生産技術の開発を計画している。

これにより、水温の高い夏からクルマエビ養殖ができ、秋には出荷が可能となることが期待される。

過去に、旧西目町の間育成場において飼育したことがあり、その時は大きなサイズとなった結果もあるので、うまくいくことを期待している。

堀内会長 知事も海の環境変化により、蓄養殖に相当力入れて進めていかなければならないと話をしているので、ぜひ推進していただきたい。

高橋（一）委員 人材育成の確保に関して、どういう方が研修に参加しているのか。

また、男鹿市には男鹿海洋高校があるが、その卒業生などを含めどのような人材育成の取り組みをされているのか教えて頂きたい。

福田主任 現在は、SNSを活用した情報発信を行っている。

現役の漁師に依頼し、今日このような魚が捕れているとかタラ等の旬な魚を使った料理などの現場のリアルな声をSNSで情報発信してもらい、若い方を中心とした幅広い年代の方々にPRするというような活動をしている。

また、県内の高校２年生に対して漁師という職業についてPRを行っている。

高校２年生は就職か進学かを決める時期であるため、県内の高校のその学年の生徒に対してパンフレットを配布しているところである。

さらに、トライアル研修ということで、漁業をやったことない方に対する体験型の研修を行い、今年度は６名の参加があり、高校３年生の方が参加した。

その方は漁師になりたいと希望して参加応募し、実際に今年の４月から漁業経営体において雇用されることとなっている。

小玉委員 消費者の観点から、先日、内館牧子さんのコラムを拝見したら、秋田のお土産で「ギバサ明太子」という商品がすごく人気食品であると記載があり、どのような商品なのか気になっているところである。

「元祖秋田のギバサ生産拡大事業」でもギバサの需要が全国的に増大しているとのことのようなのであるが、この「ギバサ明太子」という商品がどこの事業者から販売されているのか。

また、ギバサは沖縄等の南の地域のイメージがあるが、秋田が元祖で、全国的に需要が拡大しているのだろうか。

もう１点、千秋丸とはどのような船舶なのか。

長谷部主事 「ギバサ明太子」については、ナガハマコーヒーで販売を行っているようであるが、製造加工元までは把握していない。

三浦室長 ギバサの正式な名称はアカモクで、以前はそれを食べる地域は日本海側の佐渡、庄内、秋田全域ぐらいであり、全国的には殆ど食べられない海藻であったが、数年前にテレビ番組で紹介され有名になり、全国的に注目され食べられるようになった。

そのため、県内産の原料が不足し、大部分を県外から仕入れて製造しているが、加工業者からは県内の原料で製造したいとの要望がある。

そのような中で環境要因かもしれないが、年々天然のギバサは減少傾向にある。

そのため、水産振興センターでは、県内のギバサの生産拡大のため養殖技術の確立のための試験や漁場の拡大を行っているところである。

養殖試験については、漁港内などでの実験レベルではうまくいっているものの、加工業者に供給する量としては不足しているため、外海でも養殖できないか試験しているが、大量の種苗生産が難しく足踏みしている状況である。

天然の漁場の拡大については、岩盤清掃というギバサ以外の雑海藻を除去する技術があり、この技術が有効であることが分かったため、効率的に行えるか検証しているところである。

千秋丸についてであるが、これは水産振興センターに所属している 99 トンの調査船であり、かけ廻しという手法の底曳き網漁や板曳き網という漁法ができる。

船木委員 令和 6 年は漁業権の切り替え、更新されたところであるが、冒頭に会長からお話しあったように主要魚種であるハタハタやサケの漁獲量が低調である中で、秋田版次世代型漁業構築事業の資料のとおり、環境の変化に伴い魚種の転換が進んでいくと考えられる。

このような漁獲量のデータに基づき、漁法転換等に対して支援をお願いしたい。

中林課長 時代の変化に対応した産業構造に変化していかなければならない。

まずは、今できる対応として、今増えている魚種に漁法を転換したり複合化に対して支援して参りたい。

今後も蓄養殖含めて、新たな取り組みに対して支援を続けて参りたい。

藤田委員 八峰町の女性グループでハタハタでしょつつるを作って販売しているが、ここに 2～3 年ハタハタの漁獲量が減り、価格も上昇したため、しょつつるやハタハタ寿司も製造できないような状態である。

また、学校給食にも参加しているが、4 月以降供給できる魚が無く、冷凍している魚も含めて供給できる量がそろったら出すことにしている。

製造、販売について何かいい方法がないか考えているところである。

堀内会長 なかなか難しい問題である。

先ほど課長からのお話しのとおり海の環境が変わってきてることもあるので、事務局の方からも、様々な形で情報提供くださるようお願いする。

菊地委員 秋田版蓄養殖フロンティア事業の秋田版蓄養殖技術開発事業でトラフグ等の蓄養殖試験を実施するとあるが、県では 3 倍体のサクラマスの内水面試験池で安定的に種苗供給している様であるが、今後、海面で 3 倍体のサクラマスの養殖を行うような考えはあるのか。

松井主任 サクラマスについては現在、椿漁港で内水面試験池で生産しているサクラマスの種苗による飼育試験を行っているが、成長が遅く、あまり大きくなっていないのが現状である。

3 倍体サクラマスについては、まず内水面の養殖業者に向けて生産しているところなので、そちらに優先的に供給していくこととしている。

ただ、方法によっては成長が早く大きくなるという意見もあるので、いずれ海面での養殖にも活用できるのではと考えているところである。

池田委員 蓄養技術の開発のイワガキについて、金浦で 7 月に採取したものを数ヶ月蓄

養としてとあるが、この数ヶ月というのがどのくらいの期間なのか。

また、来年度は蓄養だけでなく、出荷の実証まで取り組まれるのか。

三浦室長 イワガキの蓄養殖試験に関しては、7月に採取したものを戸賀湾で蓄養し、10月に身入りを測定したところ、天然ものよりも大きい値を示した。

これは、イワガキの身入りがここ数年良くない状況が続いていたため、改善できないかと始めたところである。

来年度は、もう少し早い時期の5月から6月に採取して蓄養し、7月から8月の天然の漁期に、どのようになるのか試験を行いたいと考えている。

なお、10月は天然のイワガキの漁期から外れているので、身入りが良いとしても、市場ニーズがあるかわからないので、それも調査していきたい。

堀内会長 戸賀湾がイワガキの漁場として優れているのか。

三浦室長 戸賀湾で試験したのは、比較的静穏域で蓄養施設が安定しているため、基礎データを得るのに都合がよかったから。

金浦漁港内でできるのであれば、将来的にはそこで行いたいと考えている。

○ 議事（3）を説明した後の質疑応答・・・質疑なし

○ その他

高橋(笑)委員 サケ・マス類は人気があるので、生食でも加工品でもいいのでもう少し流通すればいいかと考える。

藤田委員 八峰町ではサバがよく捕れるが鮮度落ちるのが早く、生食で流通しにくいのが、店先ではどのように出されているものか。

高橋(笑)委員 しめサバのほか、生サバであれば生姜で煮る、焼きサバ用で出回っているほか、塩麴も流行っている。

堀内会長 秋田県全体の問題かもしれないが、食品加工が他県に比べて弱いところであるので、事務局においても承知しておいて頂きたい。

小玉委員 ハタハタについて、県内の地域別のハタハタの漁獲量の割合はどの程度か。
最近店舗で見かける、三五八漬けのハタハタは、昔たくさん捕れていたハタハタと違って大きい。秋田以外で捕れるハタハタを使用しているのではと考えるが。

奥山T L 今年約109トンの漁獲量であるが、県北地域で47トン、男鹿北部で52トン、その他で10トンとなっている。

以上